

論文

日本における本格的な点字図書館の誕生と発展:
戦災からの復興, 初年度の活動実態

立花 明彦

(静岡県立大学短期大学部)

The launch and development
of the dedicated braille library in Japan: Restoration following
the war damage and the realities of the first year's

By Akehiko TACHIBANA

(Professor of University of Shizuoka, Junior College)

抄録

本稿は、日本盲人図書館が戦後に疎開先から東京へもどり、日本点字図書館として再出発した初年度に焦点を当て、蔵書や点訳活動、サービス内容について詳らかにすると同時に、大きな方針転換となる名称変更と会員制導入の背景を考察したものである。この年は社会や経済の混乱がまだ続いていて、図書館は厳しい運営を強いられたが、利用者の支持を得、点訳運動も注目され息を吹き返した。1948年に再出発したことは、この年のヘレン・ケラーの2度目の来日を強く意識したものであり、そのことが図書館が発行した資料からも読み取れた。彼女の来日は、この図書館にも少なからぬ影響を与えたことが示唆された。

Abstract

This paper discusses the re-establishment of Library for the Blind as Japan Braille Library after its returning to Tokyo from the war-time evacuation, focusing on its first year, and scrutinises their collection, braille transcription projects and the range of services provided. Furthermore, it considers the background to the change of the Organisation's name and the adoption of membership system, both of which denote a major change of policy.

At the time of the re-establishment, Japan was still in the midst of social and economic turmoil and the library faced significant financial challenges. However, it managed to survive by winning the users' support, and by drawing public attention to the braille transcription service. The library's re-establishment in 1948 was deliberately timed to coincide with Helen Keller's second visit to Japan. This is supported by documents published by the Library. These documents also indicated that her visit hugely contributed to the re-establishment of the Library.

1 研究の背景と目的

1940年11月、本間一夫(1915～2003)によって東京豊島区雑司ヶ谷に日本盲人図書館が創設され開館した。とは言え、建物は木造2階建ての小さな借家で、本間の住居を兼ねていて、事業は階下の玄関脇6畳一間のみ。その部屋の前面の壁に特製の書棚を据え、蔵書である点字図書約700冊を並べた。このほか閲覧用の机一つに椅子2個を置いた簡素なものでしかなかった。翌年3月、本間の実家では前年買い求めてあった淀橋区諏訪町(現:新宿区高田馬場)に本間のための住宅を建設した。そこで図書館はこの建物の玄関脇の洋間に書棚を並べ、ここを書庫兼事務所として事業を行なうことになる。その2年後の1943年、利用者である盲人や篤志家からの寄付等により、念願の独立館(建て坪32坪2階建て)を同地に建設し、本格的な事業展開の体制を整える。しかし世は既に戦時下で、東京空襲の危機が迫りつつあり、事業継続と蔵書を守るために疎開を余儀なくされる。しかもそれは、1944年3月の茨城県結城郡総上村(現・茨木県下妻市)、1945年4月の本間の実家である北海道増毛町へと2度に渡った。新築された図書館は多くの善意と期待を背負っていたが、1945年5月の空襲で全焼したため、戦後の再建に託されることになり、本間がこれに着手するのは1948年3月である。このとき、これまでの名称「日本盲人図書館」を「日本点字図書館」と改め、新たな船出をする。

日本盲人図書館の時代を含め、日本点字図書館の今日に至るまでの発展過程や事業の展開・拡大、組織の変遷等については、創立からの節目で編集し発行している館の記念誌1)2)3)4)などが丁寧に整理しまとめている。また本間5)6)7)や古澤8)の著作は、民間の図書館であり、かつ公共図書館とは異なる特殊性をもつが故に生じた運営上の苦難やそれを乗り越えた事実、物心両面で援助した人々などについて詳細に実態を語る。

一方で2007年、本間の実家がある北海道増毛の蔵から複数の点字図書や封筒に納められた点字の資料、図書目録カード等が発見された。それらは、1945年の増毛への疎開で蔵書と共に持ち込まれたが、1948年の東京での再建では積み残されたものであると推測された。また2010年には日本点字図書館内から通称「本間ノート」9)と呼ばれる大学ノート複数冊が見つかった。これらはいずれも日本盲人図書館に関わるものであり、この図書館のまだ詳らかにされていない実態を物語る資料でもあることがわかった。一連の発見を受けて以降、それらの資料を読み解く作業が進められている。

西脇は、日本点字図書館所蔵永久保存「点訳奉仕者個人別台帳」を分析し、1941年1月から1948年3月までの87か月の期間、85か月にわたり、延べ218名の点訳者が、819冊の点訳本を寄贈していたこと、91名の点訳者は、戦中戦後の厳しい社会情勢下においても途切れることなく点訳図書を寄贈していた実態を突き止めた。そのうえで、この点訳奉仕活動の成就是、今日の日本点字図書館の礎を築いた日本盲人図書館の証であると述べる10)。また増毛から帰館した日本盲人図書館の蔵書のうち、点字出版図書について、発行所別に分類して再考し、それらは開館当時に現存していた27の点字出版所が製版発行した図書であることを明らかにしている11)。

立花らは、本間が図書館の創設にあたりどのような構想を描き、運営方針を立てたかについて、本間ノートならびに関連する資料を元に考察し、日本盲人図書館の特色は、運営方針とした①貸出を主たる業務とし、その対象は全国貸出とした、②貸出における無料無保証、③図書館事業のみの完遂、及び④東京での開設の4点にあることを指摘した。そのうえで、これらは齋藤百合(1891～1947)や

中村京太郎(1880～1964)、好本督(1878～1973)らとの交流や彼らが著した論文に影響されるところが大きいとの結論を導いている12)。

立花には「本間ノート」の「図書貸出事業準備記録」にある1940年11月10日の開館からその年の12月31日までに注目し、1ヶ月余りの活動実態を元に考察したものもある。そこでは、蔵書は発注したものが全部揃わず、カード目録や郵送貸出の便に供する点字版蔵書目録は未完成で、「図書館ニュース」も発行予定日からずれ込むなどして、準備万端での船出と言うよりも、見切り発車的な色合いが濃い開館であったことを指摘し、開館日を11月10日に設定したことに疑問を投げかける。そのうえで、1940年は皇紀2600年に当たり、11月10日には奉祝式典が宮城外苑において盛大に執り行なわれた。本間は、小さな図書館が幾久しく繁栄するよにとの強い思いから、皇紀2600年の奉祝にあやかろうとして、早くからこの日を開館日に定め、式典を挙げていたのではなかろうかと推察している13)。さらに立花らは本間ノートを元に開館1年の活動を整理して考察し、利用者数・貸出数・増加冊数は、本間が1年を振り返って述べているように「順調」に推移していったことを報告する。その背景には、本間が館運営の大きな方針にした①全国貸出、②貸出における無料無保証、③図書館事業のみの完遂、および東京での開設に強く拘った点にあることが指摘できるとの見解を示した14)。

このように、日本盲人図書館についての研究は一定の成果を収めつつあると言える。これに反して、日本点字図書館として再出発した戦後の復興は、社会・経済の混乱の中で苦難の連続であったことは想像に難くないし、館の記念誌や本間の著書もこれにページを割いている15)16)。しかるに、この時代に焦点を当てて図書館としての活動実態を詳らかにし、考察したものは見当たらない。それは、当時の状況を伝える資料がほとんどないことに起因する。そうした中で、日本点字図書館内に設置されている本間記念室では、本間や日本盲人図書館時代を含めた日本点字図書館の初期に関する資料の収集と整理を続けていて、2018年には、日本点字図書館として名を改め、本格的な戦後の再建に着手した1948年6月に発行した「日本点字図書館蔵書目録」(第3版)を発見している。2020年の初めには、本間が点訳奉仕者に向けて年に数回発信していた「点訳通信点字版」17)の第5信から第8信、および第12信の現物(1951年～1952年発行)が日本点字図書館へ寄贈された。これらは、1948年からの日本点字図書館としての再出発の実態を明らかにするための有用な資料の一部であると言える。

本稿はこれらを読み解き、関連する資料にも当たりつつ、戦後の社会の混乱が続く中で、日本点字図書館として新たな歩みを始めた当初の実態を、運営方針や蔵書、貸出等に注目し詳らかにするものである。

2 増毛での疎開

日本盲人図書館は、戦況が激しさを増し、東京への空襲も時間の問題とされる中で、点訳奉仕者が点訳した世界で一つとなる点訳図書をはじめ蔵書を守るべく、新築したばかりの図書館を離れ、2回の疎開を強いられた。最初は1944年3月の総上村で、ここで約1年、貸出の業務を行なった。しかし1945年3月10日の東京大空襲により、借用していた家を引き渡さねばならなくなり、この年の4

月、本間の郷里の増毛へ2度目となる疎開を余儀なくされる。増毛での点字図書館事業は、1948年3月に東京への復帰を果たすまでの約3年間続けられ、ここから全国の利用者へ図書を郵送した。

増毛で迎えた1945年8月15日、この日の正午に放送された終戦の詔勅を本間は実家の茶の間で母をはじめ皆で聴いた。このときの気持ちを、戦争に敗れた悔しさは無論あったが、灯火管制からの大きな解放感と、これから自分たちはどうなるのだろうとの不安感、それに伴って函館盲啞院卒業時、鍼灸按の免許を取得してよかったと思ったと述べる18)。ここには、社会が大きく変貌していくと予想される中で、未知への不安が色濃く表われていて、図書館事業継続には全く触れず、自らがそれまで従事したことのない鍼灸按を持ち出し、それによる生活を描こうとするなど、混乱した様子が如実に現れている。しかし、すぐに自身を取り戻し、それまでどおり郵便による全国への貸出を続ける。増毛疎開3年間の図書貸出数は、1945年2,534冊、1946年2,937冊を数え、1947年には一気に4,821冊と前年比64%の増加をみた。この年の蔵書数は3,027冊、利用者数は約400人であり、一人当たりの貸出数は12冊となる19)。この貸出数の増加は、社会の混乱が徐々に終息に向かい、郵便事情がそれまでよりも改善され、郵送の日数が短縮されてきたことと、利用者である盲人がこの時代を生きるために強く読書を欲していたことを物語っていると言える。

一方、新着図書となる点訳図書は、増毛への疎開時代も5日に1冊程度の割合で送られてきていたと本間は回顧する20)。表1は「点訳本受付簿」21)をもとに、1945年4月から1948年3月までに受け入れた点訳図書を月別に表したものである。それによれば、増毛へ疎開した1945年4月においても3冊の記録があり、点訳奉仕者に疎開先を周知していたことがうかがえる。終戦となった8月と翌月の9月にはそれぞれ2冊を受け入れているが、世の中が極めて不安定で明日の生活の見通しさえ立てにくかった社会事情にあって、どのような立場の点訳奉仕者がその作業をしたのか大いなる疑問である。上記の「点訳本受付簿」は、この疑問を解く。それによれば、これら両月合わせて4冊の図書の点訳者は藤林とし、本間一夫と記されていて、増毛へ疎開中の二人が作業したことがわかる。点訳した図書は、岸田国土著『力としての文化』、アンドレ・モーロア著・高野弥一郎訳『フランス敗れたり』である。藤林としては、本間の妻の姉であるが、病身であったことから増毛への疎開で行動を共にしていた。本間の著書には、増毛で時間に少しゆとりができると、本間自身も点訳図書作りを始め、藤林に活字の図書を読んでもらい、書き取ったと述べていて22)、「点訳本受付簿」の記載はこの事実を裏付けるものである。こうした本間自らの点訳は1945年度はこのほか、11月と12月にそれぞれ1冊、翌年の1月に3冊、2月に1冊の実績が見られる。次年度となる1946年度には、4月に1冊、9月に2冊、1947年度には7月に1冊あるだけとなっていて、年ごとに減少していく。当時、本間は直接に貸出作業に当たっていて、リクエストを受けた図書を郵送袋に入れて宛名カードをセットしたり、返却された図書の荷解きや書棚へ戻したりする作業の大方を担っていた23)。上にも記したとおり、貸出数は1947年度には前年度の2倍弱にまで伸びており、その作業に追われ、本間には点訳する時間が確保しにくい状況になったことが推察される。

戦後の1~2年で社会・経済の混乱が落ち着き、人々の生活は安定して時間的なゆとりをもつようになったとは到底思えないが、戦前から日本盲人図書館に点訳奉仕をしていた人々は、終戦直後も献身的に蔵書となる点訳の奉仕を続けており注目される。その実績は1945年度62冊、1946年度81冊、1947年度62冊で、合計205冊となる。「点訳本受付簿」にある1941年2月から1948年3月ま

表1 月別点訳寄贈書冊数

月/年度	1945	1946	1947
4月	3	15	7
5月	5	1	7
6月	3	5	5
7月	6	4	7
8月	2	2	6
9月	2	10	6
10月	7	5	3
11月	14	7	5
12月	6	1	4
1月	9	11	3
2月	2	16	7
3月	3	4	2
合計	62	81	62

(単位: 冊)

での7年間の点訳図書受入数は826冊であるから、このうちの約4分の1は戦後の3年間、すなわち増毛での疎開時代に作成された図書である。

3 日本点字図書館としての再出発

3.1 東京への復帰と名称変更

「文化事業の一である図書館だけは、我が国文化の源泉地東京にその中心を置くべきであると考えます」24)として、東京での図書館開館に拘り実行した本間であるが故に、戦争が終結したからにはいずれ東京へ復帰し、再建しようとするのは極自然なことである。本間はその時期を窺っていたが、1948年にヘレン・ケラー女史が来日し、「第2回ヘレン・ケラー・キャンペーン」25)が全国規模で実施されることを知ると、これを千載一遇の好機と捉えこの年の1月、単身で上京し、図書館復帰の準備に入った。実家の全面的な援助で高田馬場の焼け跡に15坪の住まいを建ててもらい、これを図書館と兼用して3月から戦後の東京での本格的な事業を始める。この年に発行した「日本点字図書館概要」の本間の文章「点字図書館の意義」には「ヘレン・ケラー来朝」の語を2度も用いていることから、ヘレン・ケラーの来日を図書館復興のきっかけにしようとしたことが読み取れる26)。

東京での再開に伴い、図書館の名称を「日本盲人図書館」から「日本点字図書館」へ改めた。創立時に掲げた「日本盲人図書館」の命名について本間は「その頃はまだ点字が盲人の文字だということが一般に知られていなかったため」と言い、「その小さな図書館に日本という名前をつけたのは、たいへんはずかしく面映ゆい限りです。若さゆえであり、“めくら蛇におじず”だったのかも知れませ

ん」27)と回顧する。つまり「点字図書館としたかったが、これでは世の認知を得にくいので採用できなかった」とも受け取れる説明であるが、「点字図書館」なる言葉の使用は既にいくつか見られ、本間の図書館事業の構想に大きな影響を与えた齋藤百合の論文の題名そのものが「我が国の点字図書館事業」である。加えてその論文には「桜雲会点字図書館」「新潟県盲人協会点字図書館」が当時の3大点字図書館として紹介されている(28)。さらに中央盲人福祉協会発行の『日本盲人福祉年鑑』附録「盲人福祉団体要覧」(29)には、1940年時点で、秋田県盲人協会点字図書館、名古屋盲人会点字図書館、ライトハウス点字図書館、神戸盲啞院点字図書館等の掲載がある。こうした事実を照らし合わせるとき、本間が言う「世間の人々への点字の認知度が低いこと」だけをもって「日本盲人図書館」にした理由とは考えにくく、別の理由もあったのではなかろうかとの疑問が沸く。本間が点字図書館事業をライフワークと定めこれに邁進することになるきっかけは、好本督の著書によってロンドンには蔵書17万冊を持つ世界一大きな点字図書館の存在を知ったことにある(30)。その図書館はNational Library for the Blindで、好本は「国民盲人図書館」と訳し紹介している。本間は、自身が創設する図書館は小さな出発ではあるが、将来的には世界一である国民盲人図書館のような発展を遂げたいとの思いを込め、これに合わせ「日本盲人図書館」と名付けたのではと推察する。上にも記したが、開館当時、わが国には「点字図書館」の名の下に事業を行なう施設があったが、これ以外に各地には盲人協会等による「点字図書貸出事業」「点字図書及雑誌貸出事業」「点字図書室」「点字貸出文庫」等と名乗った施設が存在した(31)。ところが、「盲人図書館」と称する施設は見当たらず、本間の図書館が日本では初めての使用になる。従来にはない看板を掲げての開館、ここにも図書館事業に向けた本間の意欲と強い意志の表明を見ることができる。

一方、「日本盲人図書館」から「日本点字図書館」への変更を本間は「過去8年間に、点字とは盲人が指先で読む文字だということがかなり社会に浸透・普及し、創立当時とは状況が変わってきました。これに即応しようというのです。」(32)と説明する。確かに日本盲人図書館開館以来、この館の事業内容や点訳奉仕、独立した館の竣工などについて新聞各紙で紹介されている(33)。しかもそこには「点字」の語を含んだ見出しが踊っていたり、点字に関連した本文が記事になっていたりで、社会一般の点字に対する認知度は上がったとも言える。ただ筆者は「点字の認知度について社会の状況が変わり、これに即応しようとした」と言うよりも、「点字」の語を前面に出さねばならない事情があったと考える。すなわち、本間の図書館が利用者である盲人の支持を得、利用者数と貸出数を伸ばし、順調な発展を続けてきた要因の一つは点訳奉仕者による着実な蔵書の増加にある。戦後においても終戦の年から点訳奉仕者による点訳は継続され、完成した図書が届けられてはいたものの、実働数は戦前に比べ減少し、それに伴って新着図書の数も従前に比べ落ち込んでいた。図書館の再出発においては、蔵書の充実、新着図書の増加は不可欠であり、それが再出発の成功の是非を左右する要素でもあり、点訳に携わる奉仕者の数も増員することが求められた。そのためには、「盲人図書館」ではなく「点字図書館」として直接に社会へ呼びかけるほうが効果的であると判断したと推察される。現にこの年、本間は点訳奉仕を世に訴える長文を書き、NHKのラジオ番組「私たちの言葉」に投稿、9月6日の朝、それが全国に向けて放送されている(34)。

3.2 会費制度の導入

立花らが指摘するように、日本盲人図書館が運営方針の一つとした「無料無保証」は、当時の図書館としては異例であり、それはこの館の特色とされる(35)。齋藤百合によれば、当時の3大図書館と言われた館のうち、桜雲会点字図書館は1年間有効の借覧券を1円で発行し、貸出・閲覧にはこれを必要とした。市立名古屋図書館点字文庫は、館内閲覧の場合無料であったが、館外貸出では同市盲学校生徒以外の者に対して保証金2円を求めた。さらに新潟県盲人協会点字図書館は、協会員の場合は無料としたが、会員外読者には、年30銭の借覧料を課している(36)。このように、図書館利用が有料であったことは当時としては一般的とも受け取れるが、本間は自らの図書館においては「無料無保証」で開館した。館の存在を広く周知し、利用を促そうとして開館後の1年で4回、週刊新聞「大阪点字毎日」に次のような有料広告を出している。各広告の文章は本間が作文したものであるが、移転広告となる第986号を除き、広告文の中に「無料無保証」の言葉を織り交ぜており、これを強調しようとしたことが読み取れる。

日本盲人図書館「点字大阪毎日」への広告文

*原文は点字。墨字訳は筆者による。文中の句読点は筆者の判断で付けた。

無料無保証で全国の誰にでも貸し出す点字図書館のできたことをご存知ですか。詳細は、東京市豊島区雑司ヶ谷町2の426「日本盲人図書館」へお問い合わせください。ただちにお返事差し上げます。
(点字大阪毎日第975号、昭和16年1月16日、p.8)

日本盲人図書館は、今回、雑司ヶ谷より省線高田馬場駅から約5丁の東京市淀橋区諏訪町212番地へひき移りました。今後、一層全盲界のご利用ご協力を切望してやみません。

(「点字大阪毎日」第986号、昭和16年4月3日、p.10)

蔵書1000余冊、誰にも無料無保証で貸し出します。毎月発行のニュースは1ヵ年わずかに50銭。詳細、お問い合わせあれ。東京市淀橋区諏訪町212日本盲人図書館。振り替え：東京100288。
(点字大阪毎日第993号、昭和16年5月22日、p.20)

「灯火親しむべきの候」無料無保証の図書館を利用されたし。東京市淀橋区諏訪町212日本盲人図書館
(点字大阪毎日第1011号、昭和16年9月25日、p.20)

「無料」での貸出は、戦時下や終戦直後も継続されたが、日本点字図書館として東京での再出発をした1948年4月からはこの方針を凍結し、会費制度を導入した。その理由を本間は著書の中で次のように語っている。

それまで図書の貸出しは無料でした。それを、年額200円を盲人読者に負担してもらおうというのです。これは当時猛烈に進みつつあったインフレに対処するためには、やむを得ない防

衛策で、これにより少しでも財政的基礎をつくっておこうという考えからでした。37)

1948年の物価は、たばこ「ゴールデンバット」11円、新聞購読月額44円75銭、映画封切館40円、コーヒー20円、米10キロ222円90銭とある。年額200円は利用者にとってどう響いたかは不明であるが、支払いにおいては2回の分納を認め、また優秀かつ熱心な方で特別の事情のある場合、軽減の道を設けるなど、利用者への配慮が伺える。加えて、会費を修めると館が年4回発行する新着図書などを紹介する機関誌「図書館ニュース」を無料で配布した(38)。しかし図書館にとって会費から得られる収入は決して十分ではなく、翌年、300円に値上げせねば運営がままならない状況にまで追い込まれ、少し持ち直すとまた200円に戻すことをして、財政的にどん底にあった時代を凌いだ。この会費制度は、1955年に厚生省の事業委託を受けたとき、ようやく撤廃することができ、再び無料貸出となった。

3.3 蔵書目録の発行

全国の盲人を対象に郵送による貸出を行なう図書館では、利用者が読みたい図書を選択し、発送の依頼をするために手元に持つ蔵書目録は必須である。日本盲人図書館時代には、開館した翌月の1940年12月、最初の蔵書目録を発行し、点訳運動の結果として蔵書が増していった戦時中に第2版を出している。日本点字図書館として東京での復興を始めた1948年には6月10日付けで、第2版以降の新入図書をも収めた「蔵書目録第3版」(以下「第3版」と記す)を発行し、貸出に備えた。第1版と第2版は現物が存在しないためにその内容を把握できない。しかし第3版は、「心の家」点字講習会修了者で第1号の点訳図書を収めた稲枝京子の遺族から2011年に寄贈された点訳関係の遺品の中に含まれていた。それは当時を語る貴重な資料となっている。

第3版は76ページで、これに「新入図書紹介」と題した付録2ページを加えたものからなり、定価40円で頒布した。最初に本間の「ご挨拶」があり、続いて10の分野に分けた蔵書が紹介され、巻末には「貸出規定」と「会員の方々へ」が割り付けられている。収録された図書数は917タイトル1916冊で、各図書は書名・冊数・著者(訳者)の順に並ぶ。巻末の「新入図書紹介」には、点訳者の氏名も記されているのに対し、目録ではそれを割愛している。

活字の図書を点訳した場合、複数冊になることがあるが、「点訳本受付簿」を見ていると、大方の点訳者は点字図書1冊の分量になるとそれをすぐに図書館へ届けていたことがわかる。第3版には、こうした全冊通しての点訳が完了していない図書についても掲載していて、その旨を注で伝えている。また資材節約の関係から、「著」「訳」「編」などの語を割愛したと記していて、物資の調達が容易ではなかったことと、経費を抑えたいとする図書館側の事情が読み取れる。

ところで、これまで館が発行する蔵書目録や「図書館ニュース」などの点字の製版と印刷は、齋藤百合が主催する陽光会ホームへ依頼していた。しかしながら、第3版は静岡県富士郡富士根村(現・富士宮市)にあった富士根園点字出版所(39)に発注している。陽光会ホームは、東京の空襲が激しさを増す中で疎開を強いられ、これに伴い1944年に閉鎖。終戦後、東京への帰郷は果たしたものの、1947年に齋藤百合が病死し、復興には至らなかった。戦前、東京には複数の点字出版所が存在したが、戦災によって多くが廃業に迫られた。本間は「文藝春秋」の1951年2月号に「点字の世界: 盲

人にも文化を与えよ!!」と題する文章を投稿していて、その中でこのころの点字出版の様子を「点字定期行物の世界は一応にぎやかだといっていい。ところが、単行本の世界はというと点字出版社が東京に1ヶ所、大阪に2ヶ所、それに、静岡、京都にもあって、それぞれ努力しているにもかかわらず、ここはまた、極めて寥寥なんとも情けない限りである。」と紹介している(40)。この一文からも、点字の製版と印刷をする施設が少なく、遠方の富士根園に発注したことは頷けるが、もう一つ理由があったと推量する。それは、富士根園の点字編集職員に陽光会ホームで点字の出版にも携わっていた粟津(当時は金井)キヨ(41)がいて、本間自身顔馴染みであったことである。粟津は、陽光会ホームで製版・印刷した蔵書目録の初版や第2版にも関わっていたと思われ、第3版の作業においても本間は安心して任せられたと考えられる。

3.4 本間の「ご挨拶」

第3版を開くと、中扉の次には本間が執筆した「ご挨拶」が続く。点字のページで2ページのそれには次のようにある。

ご挨拶 点字を知る数少ない盲人の中から、あなたは更に機会を得て今、この図書館を利用しておられます。いまだ発展の途上にあつて、意に満たぬところの多い本館ではありますが、奇しくもここに結ばれたあなたのためには、できる限りお役に立ちたいと願っています。盲人にとって、読書が晴眼者以上に心の糧であることは御承知のとおりです。どうか、あなたと図書館との関係が、単なる事業とこれを利用する者との関係に留まらず、深い愛情と強い信頼とに根ざすものであってほしいと思います。

この種の事業は、直接利用する読者と、私ども職員と、周囲から援助する晴眼者の力とが三位一体化されて初めて完全を期し得られます。私どもは今、日本の黎明期に立って、この事業の輝かしい未来を夢見ると共に、険しかった過去7年有半の歩みに思いを致しつつ、踏み締め一歩一歩に精魂を傾ける覚悟です。御協力を切にお願いいたします。(42)

冒頭の「点字を知る数少ない盲人」とは、盲教育がまだ義務化されておらず、このために盲人と言えども点字の習得者が少なかった社会背景を指す。中村京太郎は「盲人と読書」の論考(43)で1936年10月調査での日本の盲人総数と学校卒業者数、無学者数を紹介しているが、無学者を点字未習得者とみた場合、その数は盲人総数の約6割を占め、点字を読める盲人は約4割でしかない。「蔵書目録」発行時からすれば、10年余りも前の数字ではあるが、本間にこうした一文を書かせていることは、状況が10年前と大きく変わっていないことを物語るものである。本間の文章は、そのうえで蔵書目録を手にした盲人が図書館の利用者になったことを喜び、図書館との関係が深い愛情と強い信頼とに根ざすものであってほしいと願う。単なる事業とこれを利用する者との関係に留まらないことを希望する背景には、復興にあるこの図書館を利用し、支援し、盛り立てて発展させてほしいとの祈りにも近い願いが込められているようにうかがえる。

3.5 復興時の蔵書

日本点字図書館としての歩みを始めた1948年、館では早々に「昭和23年版 日本点字図書館概要」と題したリーフレットを作成している。この図書館を宣伝するためのものと推測され、「点字図書館の意義」と題する本間の文章を乗せ、事業の現況、貸出規定、沿革、館の目的、組織・経営方法などを紹介する。事業の現況では、4月現在での蔵書数として3,027冊とあるが、既に記したように第3版に収録されている図書の冊数1,916冊、巻末の「新入図書紹介」に記載されている22冊を合わせた1,938冊と齟齬を生じる。表2は、第3版での分類別の冊数と「図書館概要」にある蔵書一覧の分類別冊数を見比べたものである。「図書館概要」4月現在での蔵書数と、第3版の収録冊数には1,089冊の開きが認められる。この開きは、一つに、「図書館概要」の蔵書一覧には「洋書」150冊、「雑」625冊とあるのに対し、第3版ではそれらが収められていないことによる。とはいえ、それでも314冊の差が見られる。

表2 「第3版」と「図書館概要」蔵書数比較

分類	蔵書目録	図書館概要
盲人関係書	67	78
宗教・哲学・修養	398	469
文学	601	709
語学	174	193
歴史・伝記	63	76
音楽	22	25
社会科学	37	43
自然科学	57	66
医学	377	451
少年少女向き書類	120	142
洋書	—	150
雑	—	625
合計	1,916	3,027

(単位: 冊)

本間は1948年に疎開先の増毛を引き上げるとき、東京へ蔵書を送るに当たり、理療科などの教科書、世相を反映した戦記物、破損の激しい図書など複数の図書を意図的に残している。それらは、実家の人々によって丁寧に保存されていて、その存在が本間の没後の2007年に明らかになった。もちろん本間自身、そのことを記憶していたが、日本点字図書館の元館長・小野俊己は、これについて本間が「あれはごみだから」と言って、それらの蔵書の引き上げに取り合わなかったことをメモしている(44)。増毛の蔵に残され、日本点字図書館としての再出発では蔵書に加えられなかった図書数は210冊とあり(45)、「日本点字図書館概要」と第3版にある蔵書数との差314冊からさらにこの数を

差し引いても、104冊の食い違いが生じる。最も開きの大きい分野は文学で108冊、次に医学の74冊、宗教・哲学・修養の71冊と続く。逆に開きの小さい分野は音楽の3冊、社会科学の6冊、自然科学の9冊で、いずれも一桁の数字となっている。実際、日本盲人図書館時代には所蔵していた『愛国百人一首』『海軍』『海戦』『海底記』『学徒の書』『教育勅語謹解』『軍歌集』『軍人援護』『軍神を生んだ母』『皇國二千六百年史』『国体の本義』『時局に処する道』『時局の重大性』『支那事変忠勇美談集』『日支事変忠勇美談集』等は、「第3版」には見当たらず、日本点字図書館の貸出図書として除籍されたことが読み取れる。つまり、開館から戦後までの日本盲人図書館は、時局柄、失明軍人の発生も合わせ、世の影響をある程度受けざるを得ず、蔵書構成にもそれが現れていた。「日本盲人図書館概要」で本間は、点字図書館の意義について次のように書いている。

　　悽愴苛烈な決戦下一億國民中、唯一人でもその力を出し切つてゐないものがあるとすれば、それは由々しい問題であります。此の意味に於て、私は聖戦に兩眼を捧げた失明勇士及び十萬盲同胞の存在を、御考慮いたゞきたいと思ふのであります。/失明の苦惱については今更語る迄もありません。殊に突如暗黒の世界に投ぜられた失明勇士のそれを思ふ時、國民ひとしく肅然たらざるを得ないであります。また一般失明者も、その燃ゆる愛國の至情に於て何等劣るものではありません。只悲しむべきは、點字圖書の不足から來る教養の乏しさであり、點字新刊書に對する満たされざる激しい慾求であります。/點字書に向ふ時のみ、失明者も晴眼者同様の喜びが得られることは、私自身の體驗であり、此處に點字圖書館の絶對なる意義があるのであります。完備せる點字圖書館は、失明者の生活戦上實に唯一のオアシスであり、これなくしては失明勇士の再起奉公の完全は期し得られないのであります。(46)

この文から本間は、世の流れを強く意識し、それを追い風にして図書館運営を維持しようとしていたように推察される。その結果、蔵書も世相や時局を反映したものが少なからずあったことは理解できる。後半の一文「只悲しむべきは、點字圖書の不足から來る教養の乏しさであり、點字新刊書に對する満たされざる激しい慾求であります。」は、当時の点字出版界が資材不足等の影響から停頓気味にあり、このために一層の点訳奉仕を強く求めたことを意味する。

表3は、第3版収載の図書について分類別にタイトル数、冊数、比率を示したものである。蔵書が最も多い分野は文学の284タイトル601冊で、今日の点字図書館と共通するものの、その占有率は31.0%でしかなく、今日とは大きく異なる。また次に多い分野は宗教・哲学・修養の209タイトル398冊22.8%となっている。医学は、今日では文学に次ぐ分野であるが、当時は160タイトル377冊、比率も17.4%となっていて、第3位であるのは興味深い。「文学」の蔵書数が多いのは点訳奉仕者の活動の成果・証であり、「宗教・哲学・修養」と「医学」のそれは点字出版界の戦前の蓄積である。

3.6 点訳奉仕運動の復活

日本点字図書館としての再出発に当たり本間は、本拠となる「図書館の再建」と、点字図書増加のための「点訳運動」の二つをヘレン・ケラー来朝の記念事業として打ち出し取り組んでいる。このうち、点訳運動については第1期目標として、1ヶ年間に1000冊の新しい点字図書を得るため、年4

表3 「第3版」分類別タイトル数等

分類	タイトル数	冊数	比率 (%)
盲人関係書	34	67	3.7
宗教・哲学・修養	209	398	22.8
文学	284	601	31.0
語学	54	174	5.9
歴史・伝記	30	63	3.2
音楽	10	22	1.1
社会科学	20	37	2.2
自然科学	33	57	3.6
医学	160	377	17.4
少年少女向き書類	83	120	9.1
合計	917	1,916	100.0

冊を書き上げる 250 人の奉仕者を求める運動を展開した。「日本点字図書館概要」にはこのことを公表して、次のように述べて広く点訳奉仕を呼びかける (47)。

点字は六つの點が、ローマ字式に組合わされてできた、カンタンな音表文字で、誰にでもすぐ覚えられるものであります。すこしなれば、一時間三枚の寫本はらくにできますから、三日に一時間奉仕して下されば、年三百六十枚、点字書四冊ができ上るのであります。云いかえれば、一日一枚 (約二十分) を、三百六十日書いていたゞることによつて、二百五十人の仲間になつていたゞけるのでございます。(48)

点字を習得し、点訳することは難しくないと強調したくて記した文章ではあるが、いささか誇張した内容であることは否めない。一方で、どうしても一定数の点訳奉仕者を獲得し、事業を軌道に乗せたいとの心の内も透かして見える文章である。図書館では、点訳奉仕志望者への対応として、毎週水・土の2日、希望の時間の個人教授と、遠方の方への通信教育を開始する (49)。この広報に当たっては本間が点訳奉仕を世に訴える長文をNHK ラジオ「私たちの言葉」に投稿し、1948年9月6日の朝の放送で全国に報じられた。NHKは、同年10月17日の「市民の時間」でも取り上げており、また同月22日には毎日新聞もこれを掲載している (50)。この点訳運動は功を奏し、翌年版の「日本点字図書館概要」では、「昨年二月戦災地跡に歸つてからは、点訳奉仕運動の画期的な發展と相まつて」なる一文が見られ、点字図書は前年の公称数 3,027 冊から 3,745 冊、点訳奉仕者約 200 名と記されている (51)。

3.7 貸出サービスと利用者

下記は日本盲人図書館と日本点字図書館の貸出規定を示したものである。

圖書貸出規定 (日本盲人図書館)52)

- 一、 本館の圖書を始めて借受けやうとする方は氏名、住所、年齢、男女別、職業の五項目を明記の上、先づ「圖書借出券」をお申込下さい。
 - 二、 圖書貸出は一人一冊とし貸出期間は内地二週間以内、外地三週間以内と致します。
 - 三、 借受けた圖書を痛め、若しくはなくした方には、その修繕補充の費用を負担して頂きます。
 - 四、 以上の規定に違反する方に対しては、圖書貸出を停止する事があります。
- (註一) 本館の圖書は一切無料且無保証を以て貸出します。
- (註二) 利用者中、失明軍人に対しては圖書の優先的貸出を行ふ他、本館の出版物の寄贈その他各種の便宜をも計ります。

〈貸出規定〉 (日本点字図書館)53)

- 一、 本館の讀者(會員)になろうとする方は、氏名、住所、性別、生年月日、職業、出身學校名と卒業年月(學生は學校名と學年)、失明の年令と原因の七項目を書き、會費一ヵ年分(二百圓)を添えて、お申込み下さい。
- 二、 貸出は一人一回一冊を原則とします。
- 三、 貸出期間は往復の日数を除いて一週間以内、鍼按醫學などの學術書に限り、二週間以内といたします。
- 四、 圖書をいため、またはなくした方には、修理補充の費用をご負擔願います。

貸出規定の全体は4項目からなることは日本盲人図書館時代と日本点字図書館で共通するが、その内容を見ると、異なる点が多いことに気づかされる。利用登録では、前身(日本盲人図書館)時代は「圖書借出券」を発行していたが、戦後の再出発(日本点字図書館)ではこれを廃止している。また戦後は会費制を導入したために「會員」なる語を用いる。登録に当たっては、前身の時代、個人情報の提供は氏名・住所・年齢・男女別・職業の5項目であったのに対し、戦後では、年齢を生年月日に改め、さらに「職業・出身学校名と卒業年月(學生は学校名と學年)」、「失明の年齢と原因」の2項目を追加している。貸出冊数は前身時代、戦後いずれも同じであるが、貸出期間が前身時代は2週間であるのに対して、戦後は1週間とあって異なる。とはいえ、これは往復の郵送期間を貸出期間に加えるか否かであり、表現方法の差異と見るべきで、実質は同じである。ただ、戦後は學術書に限り2週間としていて、配慮をする。圖書を痛め、または紛失に対する修繕補充の費用負担は前身時代と戦後いずれも一文がある。また戦前は最後に註が書き記されていて、貸出における「無料無保証」と、失明軍人に対する圖書の優先的貸出ほか、優遇措置を示す。戦前と戦後では社会的背景や基準、世相、価値観が一変したが、貸出規定もそれに伴って改定されたことが理解できる。

なお、戦後の貸出規定については、「蔵書目録第3版」にも記されているが、それは、「図書館概要」にある内容と比べ、表現等少しばかり異なる部分がある。一つは、貸出期間について、「図書館概要」は「貸出期間は往復の日数を除いて1週間以内、鍼按医学などの學術書に限り、2週間以内といたし

ます。」とあるのに対して、「蔵書目録第3版」は「貸出期間は往復の日数を除いて小説など軽い読み物は1週間以内、医学など学術書は2週間以内といたします。」とある。そのうえで別の項で「軽い読み物」とは「だいたい盲人関係書、修養、文学、歴史、伝記、音楽、少年少女向き書類を、学術書とは、だいたい宗教、哲学、語学、社会科学、自然科学、医学を指します」と記している。また事情がある場合には期間の延長にも応ずることを付す54)。「蔵書目録」は、点字版で発行していて、利用者である盲人が直接に手にするものであるため、丁寧に記したとも解釈できる。同じ「蔵書目録」には最後に「以上の規定に違反した方には、図書貸出を停止することがあります」があるのに対し、「図書館概要」にはこれが欠落しているのは不可解である。

1948年の日本はまだ戦後のインフレが収まっておらず、物価の高騰と物資の調達難が続いていて、盲人をはじめ人々には経済的ゆとりなどなかった。そうしたことは、日本点字図書館のサービスからもうかがい知ることができ、館では貸出事業に関連して「点字雑誌共読会」「教養図書回読会」を設けている。これは、各点字出版所から発行されている主な雑誌を数名を一組として次々に回覧するもので、言うならば、一つの雑誌・図書を合同で購入し、その代金を割り勘にするものである。図書館はその中継役を担い、雑誌をまとめて購入し、各グループへ郵送した。こうすることによって、読者に定価の約3分の1の代金で読めるようにした。「点字雑誌共読会」の場合、一組は3人で、この年の参加者数は170人あり、「図書館概要」には時節柄非常に喜ばれているとの記載が見られる55)。当時はまだ図書館が雑誌をそろえ、利用に供することはしておらず、この会によって利用者は雑誌購読料を抑えるとともに、回覧とは言え少人数であるので回覧も良く、比較的早く手にすることができたと想像される。点字出版所からすれば営業妨害のように映るが、当時とすれば、盲人の経済事情からして広く購読者を獲得することは期待できず、一方で価格を下げることも経営上困難である。しかも雑誌は郵送で届けていたので、個々の購読者へ発送することは手間もかかるが、この場合、図書館へまとめて送り届ければよい。さらには一定部数が確保されるので、メリットは少なくなかったと推察される。

「蔵書目録第3版」の「会員の方々へ」の項目では、4番目に図書郵送用布カバーについて触れていて、その最後に「なおこの布カバーはなるべく自分のものを1個お作りください。」とある56)。これも物資難で、図書館として郵送カバーを十分に確保できないために利用者をお願いしたものであり、ここにも当時の社会事情を見ることができる。

雑誌の回覧では「回覧雑誌あゆみ」もある。「あゆみ」は読書を中心とした利用者の感想を編集したもので年に4回、図書館が発行した。これを有志の回覧に供し、読書文化の向上に資しようとした。このほか、東京と近県に住む読者のため年数回、読者会を催している。これは点字読書を中心に、文化的諸問題を研究したもののようで、大いに喜ばれたと言う57)。また2か月に1度「図書館ニュース」を発行し、新着図書それぞれに解説を付けて紹介し、利用を促した。

4 まとめ

日本点字図書館の戦後の再出発は、2度目となるヘレン・ケラーの1948年の来朝をきっかけに東京へ復帰したときから始まる。ヘレン・ケラーの来朝を意識したことは本間自身が著書の中で「へ

レン・ケラー女史の来日を機に再出発」との見出しを建てて述べていることから容易に理解できる 58)。しかし、本間はなぜヘレン・ケラーのそれを意識したのであろうか。「図書館概要」で本間は「点字図書館の生命は、新しい点字図書であります。」と書いているように 59)、図書館の再出発では、蔵書の充実、新着図書の増加は不可欠であり、それが再出発の成功の是非を左右する要素の一つであると考えた。そのためには点訳に携わる奉仕者の数を増員することが求められる。もう一つ、空襲で拠点となる建物を焼失したためにその再建が急がれたが、財政的には厳しく、実現には戦時中に竣工した初の建物同様、篤志家の援助、すなわち寄付に頼らねばならなかった。この二つの課題解決には世間の目・関心を盲人の実態や福祉、特に読書環境の問題に向けさせることが必要であり、ヘレン・ケラーの訪日による「第 2 回ヘレン・ケラー・キャンペーン」はその絶好の機会になり得ると考えた と推察される。実際、館の広報に用いられた「図書館概要」60) ではヘレン・ケラーの名前を複数回用いて図書館の意義や事業展開の計画を述べていることから、それを読み取ることができる。結果、点訳奉仕運動では本間の読みが的中し、奉仕者の増員と蔵書の増加をみたことは先述のとおりである。ヘレン・ケラーのこのときの日本訪問は、身体障害者福祉法の制定にも貢献したとされ、さらには国民全体にもたらしたのも小さくないと言われるが、再出発した日本点字図書館も、ヘレン・ケラーから有形無形の大きな恩恵を得たと言える。

1944 年に発行した「図書館概要」では、その年の 3 月時点での利用者数 (原文は利用申込者総数) を 1,953 名とし、昭和 18 年度は 1 か年で 559 人の新規登録があったと記している 61)。これが 1948 年の再出発時、利用者数は約 400 人とあり 62)、戦時下から戦後の 3 年で約 5 分の 1 に大きく減少する。しかしながら、1949 年の「事業概要」では利用者数 (会員)729 人、貸出数は 10,803 冊となっていて、着実な復活を見せ、年度が変わるとさらに貸出増加の波は大きくなっていく 63)。他方、ヘレン・ケラー来朝の記念事業としたもう一つの館建設は容易に実現には至らず、1954 年 11 月、厚生省 (当時) の点字図書製作貸出委託事業開始に伴い、必要な建物として建てられた木造一部 2 階建ての落成を待たねばならなかった。点訳運動が息を吹き返して盛んになり、蔵書は著しい伸びを見せ、それに伴って利用者と貸出数も増加の一途を辿るが、経済の混乱は終息せず、個人経営による図書館はその後数年、館の歴史上最も厳しい財政状況に追い込まれ、胸突き八丁の運営に突入することになる。

注

- 1) 日本点字図書館 50 年史編集委員会編『日本点字図書館 50 年史』日本点字図書館, 1994, 347p.
- 2) 記念誌製作委員会編『日本点字図書館創立 70 周年記念誌 - 新たな世紀, 新たなサービス』日本点字図書館, 2011, 141p.
- 3) 伊藤宣真他編『点字とあゆんだ 70 年 - 日本点字図書館点訳奉仕活動の記録 -』日本点字図書館, 2010, 24p.
- 4) 本間記念室委員会編『本間一夫と日本盲人図書館 - 本間一夫生誕百年記念出版 -』日本点字図書館, 2015, 110p.
- 5) 本間一夫『指と耳で読む』岩波書店, 1980, 213p.
- 6) 本間一夫『点字あればこそ一出会いと感謝と』善本社, 1997, 272p.

- 7) 本間一夫『我が人生「日本点字図書館」』日本図書センター, 2001, 215p.
- 8) 古澤敏雄『本間一夫この人, その時代』善本社, 1997, 319p.
- 9) 各ノートは表紙に「KWANSEI GAKUIN UNIVERSITY」と印刷されていて、ページを捲ると、6行携帯用点字器で書いたと思われる点字が書かれているのみで墨字はない。記載内容をも含めて考えると、それらは本間が関西学院大学在学中の1936年～1939年に購入し、講義内容等で用いていたものであると判断された。使い切らなかったノートは大学を卒業し、上京した後、図書館開設準備の記録や開館後の業務日誌としても用いたようで、そうしたものも7冊含まれている。日本点字図書館内に設置されている「本間記念室委員会」では、これら本間による直筆の大学ノートを「本間ノート」と総称し用いている。
- 10) 西脇智子「日本盲人図書館における点訳奉仕活動の実態: 点訳奉仕者個人別台帳の閲覧結果より」『実践女子大学短期大学部紀要』39, 2018, p.111-125.
- 11) 西脇智子「日本盲人図書館の点字出版本」『実践女子大学短期大学部紀要』40, 2019, p.69-83.
- 12) 立花明彦, 山田美雪「本間ノートを読み解く 2: 日本盲人図書館の構想とその創設」『図書館界』71(2), 2019, p.150-155.
- 13) 立花明彦「日本盲人図書館開館直後の活動実態」『Journal of LISSASPAC JAPAN – アジア太平洋図書館情報学会日本支部誌』1(2), 2018, p.36-41.
- 14) 立花明彦, 山田美雪「本間ノートを読み解く 1: 日本盲人図書館開館1年の活動実態」『図書館界』70(2), 2018, p.417-423.
- 15) 日本点字図書館50年史編集委員会編, 前掲1), 谷合 侑「本間一夫と日本点字図書館 再建期(昭和23年から27年まで)」p.229-236.
- 16) 本間一夫, 前掲5), 「5 苦難の中の再建」p.85-118.
- 17) 「点訳通信点字版」は、当時発行していた点訳奉仕者向け謄写刷り「点訳通信」とは異なり、本間が自由に点訳や盲人の生活について書いた点字4ページ程度のもの。本間はこれを1950年6月末に発した第1信の冒頭で「点訳放談」とも称している。
- 18) 本間一夫『我が人生「日本点字図書館」』日本図書センター, 2001, p.114.
- 19) 日本点字図書館50年史編集委員会編, 前掲1), p.227.
- 20) 本間一夫, 前掲5), p.80, 本間一夫, 前掲7), p.114.
- 21) 2017年8月, 日本点字図書館内で発見された「音楽帳」と印刷されたノートには、「点訳書受付簿」と手書きされていて、1941年2月から1950年9月に至る間で受け入れた点訳書について、書名, 著訳者名, 頁, 点訳者名, 寄贈期日が記録されている。またその項目の下段には日本盲人図書館初の点訳者, 稲枝京子が寄贈した点訳書, 森田たま著『随筆歳時記』3冊を受け入れたことの記録がある。
- 22) 本間一夫, 前掲5), p.81.
- 23) 同上, p.82.
- 24) 本間一夫「開館に当りて」『図書館ニュース』創刊号, 日本盲人図書館, 1940. (本文は点字書であるため, 本稿での引用は筆者が漢字仮名交じり文にし, ページ数の記載は割愛した。句読点も筆者の判断で付している。)

- 25) 日本ライトハウスの創始者である岩橋武夫(1898-1954)はヘレン・ケラー女史と深い交友関係にあり、身体障害者福祉の抜本的な改善を願い、戦前(1937年)・戦後(1948年)の2回、朝日新聞・毎日新聞の協力を得て、全国ヘレン・ケラー・キャンペーンを展開し、大きな成果を収めた。戦後のそれは女史68歳のときで、この年の8月29日～10月19日の間で展開されている。
- 26) 本間一夫「点字図書館の意義」「記念事業の二大目標」『昭和23年版日本点字図書館概要』日本点字図書館, 1948.
- 27) 本間一夫, 前掲5), p.54.
- 28) 齋藤百合「我が国の点字図書館事業」中央盲人福祉協会会誌, 創刊号, 中央盲人福祉協会, 1934, p.29-41.
- 29) 中央盲人福祉協会『日本盲人福祉年鑑』附録「盲人福祉団体要覧」, 1941.
- 30) 本間一夫, 前掲5), p.31. 7) p.49.
- 31) 中央盲人福祉協会, 前掲29).
- 32) 本間一夫, 前掲5), p.85.
- 33) 本間記念室委員会編, 前掲4)「第5章 日本盲人図書館の先行研究 日本盲人図書館を読む 1. 雑誌および新聞の掲載記事」p.66-69.
- 34) 本間一夫, 前掲5), p.86.
- 35) 立花明彦, 山田美雪, 前掲12).
- 36) 中央盲人福祉協会, 前掲28), p.35.
- 37) 本間一夫, 前掲5), p.85-86.
- 38) 「会員の方々へ」『蔵書目録第3版』日本点字図書館, 1948, p.74-76. (原本は点字)
- 39) 富士根園点字出版所については不明な点が多い。傷痍軍人で日本盲人会連合の第1期理事(1948～1950年)をも務めた石川廸三が1948年に開設し、翌年から教科書を作成している。事業は1960年ころまで続けられたと思われるがはっきりしない。点字教科書(高等部普通科を中心に、幾何、解析、物理、英語など、ほぼすべての教科)の他、理療関係書、教養書、童話、小説(青春小説も含む)、読み物系の雑誌を発行していて、それらの一部が筑波大学附属視覚特別支援学校資料室に保管されている。(土居由知「幻の点字出版所“富士根園”の周辺」(チラシ), 静岡県視覚障害支援センター, 2009)
- 40) 本間一夫「点字の世界: 盲人にも文化を与えよ!!」『文藝春秋』29(2), 1951, p.187-193.
- 41) 粟津キヨ(1919-1988)は、高田盲学校教諭として盲重複障害児の教育に当たったことで知られるが、1951年に高田盲学校へ赴任するまでの3年間、富士根園に勤めている。
- 42) 本間一夫「ご挨拶」『蔵書目録第3版』日本点字図書館, 1948. (原文は点字。墨字訳および文中の句読点は筆者による)
- 43) 中村京太郎「盲人と読書」『文部時報』639, 1938, p.60-65.
- 44) 本間記念室委員会編, 前掲4) p.34.
- 45) 同上。なお、増毛の蔵にあった点字図書は2012年に全てが日本点字図書館へ送り返され、今は本間記念室で保存されている。
- 46) 本間一夫「点字図書館の意義」『昭和19年版日本盲人図書館概要』日本盲人図書館, 1944.

- 47) 本間一夫, 前掲 26), 本間一夫「記念事業の二大目標」.
- 48) 同上.
- 49) 同上.
- 50) 本間一夫, 前掲 5), p.86.
- 51) 本間一夫「点字図書館の意義 本が訪れる」, 「日本点字図書館の現況 (1949・8 月末現在)」 「点字図書館とは何か」 『1949 年版日本点字図書館概要』 日本点字図書館, 1949.
- 52) 本間一夫, 前掲 46), 「図書貸出規定」.
- 53) 本間一夫, 前掲 26), 「貸出規定」.
- 54) 前掲 38) 「貸出規定」 p.73.
- 55) 「日本点字図書館の現況 (1949・8 月末現在)」 『1949 年版日本点字図書館概要』 日本点字図書館, 1949.
- 56) 前掲 38).
- 57) 前掲 55).
- 58) 本間一夫, 前掲 7), p.116.
- 59) 本間一夫, 前掲 26), 「記念事業の二大目標」.
- 60) 本間一夫, 前掲 26).
- 61) 本間一夫, 前掲 46), 「昭和 18 年度事業実績」.
- 62) 本間一夫, 前掲 26), 事業の現況.
- 63) 前掲 55).